

## 富士と桜 —北斎の富士から土牛の桜まで—

山種美術館（広尾） 2023. 03. 11～05. 14



世界に誇る日本のシンボル「富士山」は、2013年にユネスコの世界遺産に登録され、今年の2023年は10周年を迎えるため「記念の特別展」としての開催である。

「山種美術館」は、1966年に山種証券（現 SMBC 日興証券）と同社創業者「山崎種二」が蒐集した数百点に及ぶ美術コレクションを展開する国内初日本画専門常設展示施設として日本橋に開館その後現在地に移転している。

本展は、「富士山」を描いた日本画と浮世絵を中心に、同じく日本の象徴である「桜」を題材とした日本画をあわせて周年を祝う特別展の開催である。

「富士山」は、古くから様々な芸術の源泉となって、「葛飾北斎」や「歌川広重」が世界的にも有名で、北斎の《富嶽三十六景 凱風快晴》(1830年) (ポスター図)、広重の《東海道五十三次》とともに、北斎が富士山というテーマをさらに発展させた絵本《富嶽百景》(個人蔵)が特別に展示されている。

歌川広重 《東海道五拾三次 原 朝之富士》



東海道の原の宿を出てまもなく、湿地帯のような「浮島が原」が広がるが、ここから眺める富士山は、巨大で均整のとれた優美な姿をしていて、山頂は画面からはみ出しその高さを強調している。旅人が足を止め、振り返って眺めたほどの去りがたい風景で長閑さが伺える絶景スポットである。

奥村土牛《醍醐》 1972年 紙本・彩色



画伯は、京都・総本山・醍醐寺の「大閻千台しだれ桜」を毎年描きたい強い思いがあったが暫くの間は出来なかった。

10年を経た年に、「今年こそと思って」桜の咲く時期を待って再び同寺を訪れて、モデルとなった桜を“刷毛で胡粉などを何回も塗り重ねて制作をした”のがこの作品である。

この京都・総本山醍醐寺「太閤しだれ桜」は、2021年11月に当美術館の本館前に移植され春には花を咲かせている。